

真相

1

トレーラーの扉が大きな音を立てて開けられた。隊長は入口で仁王立ちすると、その髭を震わせながら大声で叫んだ。

「真崎まぎイ！」

隊長の怒りは中央に立っている男に向けられた。

「貴様、神にでもなったつもりか！」

真崎と呼ばれた男は眼だけを動かして、隊長の視線と相対峙あいたいじした。

長身の隊長に比べればはるかに背は低い。しかし短髪に猪首の真崎という男、その盛り上がった腕やふくらはぎは、迷彩服の下でそれ自体呼吸しているかのように躍動している。

真崎を中心に話し込んでいた男たちは、気まずい表情を浮かべて、隊長と真崎の間を空けた。

隊長は真崎にカツカツと近寄り、襟首をつかむと、「よけいなスモーク弾でニュース沙汰を起こしたと思ったら今度はバズーカ砲ときた。次から次へとド派手な真

似しやがって、いったいどういう了見だ！」

しかし真崎は隊長の手を軽く払いのけると、そばの折り畳み椅子に腰を下ろした。その顔には不敵な笑みが浮かんでいる。

「隊長さん、アンタのやり方は生ぬるいんだよ」

「なんだと？」

「社会に影響を与えることなく、隠密行動裡にすべての“リアル”を仕留める。そんなことが限られた時間の中で可能だと、本気で信じてるのか」

「小僧が生意気な口をきくじゃないか。誰のおかげでここまで——」

「ああ確かに今の俺があるのは、アンタが傭兵学校で鍛えてくれたおかげだ。だが今度の作戦はこれまでみたいな尋常なモンじゃないだろ？俺たちはみんな“ヴァーチャル”なんだぞ。お行儀よく作戦を遂行したって誰も褒めちゃくれない。メリットもない。そんなことでタイムリミットになったらどうするんだ」

「で、オマエはどうだったと言うんだ。？小娘ひとり仕留められなかったじゃないか」

真崎は初めて苦い表情を浮かべた。

「いいか真崎。貴様は俺の言うとおりにしてりゃ——」
「もういい！」

真崎は椅子を蹴って立ち上がると、脇で成り行きを見

守っていた部下たちに合図した。彼らは機敏に動く、隊長の腕を両側から固めた。

「貴様ら、裏切る気か！」

「いいや」真崎はやおら立ち上がると「アンタは使命の重大さに耐えきれず、作戦の指揮を執ることができなくなった。だからこれからは俺が隊長代理として部隊の指揮を執ることにする。……連れて行け！」

齒噛みする隊長は抵抗することもできず、監禁用の別トレーラーへと引きずられていった。

表に出た真崎は空き地に着地しているヘリコプターへと歩いていった。ヘリのすぐ横では、アンテナを調整しながら隊員がふたりがかりでパソコンと格闘していた。

「光嶋萌黄の携帯の電波は？」

真崎の問いにひとりが首を振りながら、

「ダメです。現場を離れた後、東へ向かったようですが、すぐに切れました」

「クソッ、感づかれたか」

「よもやそこまでは」

「警察や機動隊も出張ってきた。……しかたがない。一般市民に紛れ込める服装に着替えて、もう一度現地へ急行しろ。なんとしても光嶋萌黄を殺すんだ！」

真崎は命令を下すと、暮れなずむ奈良の住宅地に鋭い眼を向けた。

(……降ってきた)

萌黄の頬を水滴が叩いた。

空はすっかり厚い雲に覆われている。太陽は生駒山の向こうに沈んだらしく、あたりの風景は夜の闇に没しようとしていた。雨がいつそう蒸し暑さを高めそうだ。

「あの人、ひとりで大丈夫かな」

某家の植え込みの中、並んで身をかがめていたむんがポツリと囁いた。あの人とは揣摩しま太郎のこと。彼はふたりにここで待つように言っていると、様子を見に出ていった。

すでにパトカー爆破の現場を逃れて一時間。揣摩を含めた三人は、住宅地の軒下を縫うように逃げてきた。

このあたりはどこも起伏に富んだ住宅地で死角も多く、逃げるにも隠れるにも好都合だった。しかし安心はできない。正体不明の敵はどこから現れるか、凡人の自分たちには想像もできない。

「もちろんよ。これまで何遍もギリギリの場面を切り抜けてきはった人やからね……テレビの中では」

萌黄が尻切れトンボの答えを返すと、むんは力無くうなづいた。

「でもそんな有名人が、なんでこんなに尽くしてくれるんかな」

「それは――」

萌黄は言葉を詰まらせた。

大学で出逢ったときから、いい夢を見てるんやと信じ込んでここまでできた。冷静になってみると、超多忙の売れっ子アイドルが一ファンのためにこれほど親身になってくれるというのは、確かに合点がいかないが。

「おおい、いるかい？」

タタタツと足音と共に、揣摩が坂道を下りてきた。さすがに息を切らしている。

「待たせたね。ひとまずいい隠れ家を見つけたよ。ついてきて」

それだけ言うと身体を反転させ、坂道を駆け上がっていく。萌黄もむんも植え込みを抜け出すと、あわてて揣摩の背中を追った。

登りきったところに近鉄電車の線路があり、車も通れないほどせまい踏切があった。渡った先には頻繁に車の行き交う道路が見え、その向こうには、窓から明かりの漏れる平和そうな家々が建ち並んでいる。

踏切の左右は電車道だけに見通しがいい。追っ手が目を光らせているとしたら、一卷の終わりだ。

萌黄は、揣摩とむんに続いて踏切に足を踏み入れた。

そのとき――。

カンカンカンカン。

穏やかな夜の空気を無機質な音が切り裂いた。

それは遮断機の鳴らす警報に過ぎなかったが、瞬間、萌黄の身体は硬直し、踏切の真ん中で立ち往生してしまった。

（この音とリズム。昨日の朝の頭痛とそっくりや……）
カンカンカン。音は鳴り続ける。

ふと視界の隅に、ふたつ並んだ灯りが映った。

（頭痛の直前、これとよく似た夢を見たなあ……もしかして世界がひっくり返ったのと同関係が——）

萌黄は迫ってくる灯りをぼんやり眺めていた。

「アブない！」

背後から鋭い叫び声がしたと同時に逞しい腕が腰に巻き付き、萌黄の身体はそのまま線路脇の窪みへと転がり落ちた。間一髪、電車が横を通過していく。

「バカッ、電車に向かってってどうする！」

轟音の中、揣摩は腕の中の萌黄を激しく非難した。

「ご、ごめんなさい」

謝りながらも萌黄はどぎまぎせずにはいられなかった。いま自分は揣摩太郎に抱かれている。憧れの人の腕の中に。

電車はブレーキを軋ませながら踏切を通過していく。

萌黄はぞつとした。あのまま線路の上にいたら――。

素早く身を起こした揣摩は、

「マズいぞ、電車が止まっちゃう。騒ぎになったらヤツらに見つかる！」

揣摩は立ち上がると、萌黄を抱きかかえたまま線路の外へと向かった。しかしそこには萌黄の背丈くらいの柵が行く手を塞いでいた。

「萌黄！」

柵の向こうでむんが呼んだ。

背後で電車の乗務員扉が開く音がした。踏切まで戻っている暇はない。揣摩はリュックを萌黄の両肩からはがすと、

「受け取れ！」

と柵外のむんに放り投げた。

「登るんだ」

言いながら揣摩はひらりと柵の上にまたがり、萌黄の手を取って引き上げようとする。

「おおーい、大丈夫かー」

線路に降りた乗務員が懐中電灯の光を柵へと向けた。

しかしその時にはもう三人の姿はどこにもなかった。

揣摩が連れてきたのは一軒の家だった。彼はふたりに勝手口で待つよう言い置くと、庭の奥へと入っていった。

日はとつぷりと暮れ、街灯の光が雨に鈍く煙っている。反対側の庭に目を凝らすと、四角いものが雨に打たれている。

「ねえ萌黄。アレ、看板やない？」

「ウン」

遠くで電車発着のアナウンスが聞こえる。隣駅の近鉄学園前駅は目と鼻の先のようなだ。

「たしかこの辺の家って」

カチャツ。勝手口の扉が内側から開き、揣摩が顔をのぞかせた。

「いらつしやいませ。お入りください」

妙に得意げな顔で、おいでおいでをしている。

「なあ、揣摩さんやったつけ。ここってモデルハウスやないの？」とむん。

駅近くのこのあたりは『学園前ハウジングフェア』と銘打った総合住宅展示場になっている。

「そうだけど、何か？」

「何かやあらへんよ。不法侵入やん」

「非常時だからカタいこと抜き。さあさあ濡れるから」
むんは厳しい顔をしたが、萌黄が恨めしげな目で見上げるのでしかたなく中に入った。

「灯りが漏れるといけないから、電灯はむやみに付けなように。こっちのリビングは雨戸が閉まってるから大

丈夫だろう」

室内はひんやりとしていて、萌黄はようやく人心地つけた気がした。

「さつき俺が通りかかったら、社員さんがちょうど鍵を閉めて帰ろうとしててさ。でグルリと見て回ったら二階の窓が半開きなのを発見してね。天は我に味方したーって思ったよ」

「それじゃ二階から入ったんですか？」

「そうさ。木から屋根にひらりと飛び移ってね」

「……カッコいい」

萌黄の目はすっかりハート形になっている。

「家の中の様子を見てくるから休んでて」

揣摩はリビングを出ていった。萌黄はその後ろ姿を潤んだ目で見送ったが、むんはハーツとため息をついて、ピンクのソファにどすんと腰をおろした。

リビングにはテレビやサイドボードなどがソファを囲むように置かれていて、シャンデリアめいた照明が部屋の隅々まで照らしている。

「ねえ、お母さんが亡くなったって本当？」

萌黄はむんの隣に座ると、うんとうなずいた。

「話してよ。今日どんなことがあったのか」

萌黄は、揣摩の車で帰宅してからのことをかいつまんで話した。さすがに母親の身体が砂になって砕けたところ

ろではむんの顔は青くなり、パトカーが攻撃を受けた話に至っては信じられないと首を振った。

「わたしの空想やないよ。ホンマやねんから」

「でもなんで萌黄が狙われてるんよ？」

「知らーん」

「突拍子もない話ばかり。大怪我した人がみんな砂になっってしまうやなんて、SFやわ」

萌黄は変わり果てた母の顔を思い出すと、全身が粟立つ思いがした。じっさいにその目で見ないことには信じられないに違いない。

「萌黄、ウチに来^けえへん？」

「むんのアパートに？」

「せまいけどここより安心できると思うよ。あんなよく知らん人に付いていくより——」

「揣摩さんのこと、悪く言わんというて！」

3

しまった！

あわてて口を押さえたが一度出た言葉は取り返せない。萌黄は唇を噛みながら、心の中は後悔の念でいっぱいになった。

（むんと言い争うなんて、今まで一度もなかったのに）

萌黄は考えるより先に頭を下げていた。

「ごめん」

「ごめんね」

ふたりの声は合わせたように重なった。萌黄はそれに勇気を得て笑顔を見せようとしたが、泣き笑いのような表情になってしまった。

むんは黒のパンツで隠した長い足を組み直すと、体裁を取り繕うような咳払いをして、

「ひどい言い方してしもたわ。許して」

「ううん、わたしも疲れてたから。それに……」

「ん？」

「怖いし」

「そうやね。萌黄の今日一日に起きた事件って、どれもこれも――」

「昨日からよ」

「……昨日からって、アレまだ続いてるん？」

「うん、世の中ひっくり返ったまま。もう何が何やら、謎ばかり。いい加減にしてほしいわ」

萌黄はぴつたりと閉じられた雨戸に目をやった。外の雨音はさつきより勢いを増している。

むんは優しい声で、

「だからよ。だから解けそうな糸口があったら掴んでおきたいんよ。萌黄はわたしよりはるかに頭いいし」

「プログラミングだけよ」

「そう、論理思考がね。だから手を貸して。わたし、あの揣摩さんともう少しお話してみたい」

むんはあくまで揣摩の好意を疑ってる。だからこそ自分を気遣って「問い質^{ただ}したい」とは言わず「話したい」と表現したのだ。

（むんはいつも冷静だ。これまでも、これからも）

リビングの入口に渦中の人物が戻ってきた。携帯に話しかけており「それじゃ頼んだよ」と告げると通話を切り、大股の足取りでふたりのそばに寄ってきた。

「このモデルハウス、使えそうだ。水道も出るしガスも通じてる。風呂を焚こうか」

「今の電話はどなたと？」とむん。

「マネージャーの柳瀬さ。ほら俺の車を運転していた。やっと連絡が取れてね。ずっと警察に職務質問されてたらしい。俺が萌黄さんと逃げてるんだらうって警察がなかなか放してくれないと嘆いてたけど、もうすぐ解放されるだらうって。もちろん俺たちが逃げてここにいないとはしゃべらないように言い含めておいた」

揣摩は向かいのソファに背中からダイヴすると、手足を伸ばして「疲れたー」と一声叫んだ。

「揣摩さん」

むんが震える声で、口を開いた。

「どうして、こんなにまでして萌黄を助けてくれたんですか？」

揣摩はエツと声をあげると、ソファの上に起きあがった。

「どうしてって……入ったばかりの大学で案内してくれ
たし、俺のファンだから大切にしないといけないし」

「萌黄に聞いたんですけど、あなたって国民的なアイドルだそうですね。そんな超有名人がたったひとりのファンのために？」

「いけないかな」

「いけなくはありません。萌黄にすればおあつらえ向きの助っ人だし」

揣摩はわずかに眉をひそめた。

「何が言いたいのか？」

「素朴な疑問です。売れっ子スターのあなたが、会ったばかりのファンのために貴重な時間を割いてまでして、逃げるのを手伝ってるのが腑に落ちないんです。さっきのように命がけで助けてくれたり」

「目の前で困ってる人がいるのを、放っておけないだけだよ」

「警察に追われても？」

むんのそのひと言に、揣摩は初めて視線を逸らした。

「あなたのような芸能人が一番嫌うのがスキャンダルで

すよね。ましてや警察沙汰なんて起こしたくないはず」

むんの声は知らず知らず、険を含んでいた。

「マネージャーさんは気が気じゃないと思いますよ。警察はきつと萌黄やパトカーを攻撃した連中とあなたがつながってるんじゃないかと疑ってるでしょう。ふつうならすぐ警察に連絡を取って、萌黄の身柄の安全を要請するのが当然だと思うんですけど」

「だから警察はアテにならないって！」

「じゃあ、あなたに警察以上のことができるの？」

「デキる！」

叫ぶと揣摩は立ち上がり、部屋の中を歩き始めた。

むんと萌黄は顔を見合わせた。

揣摩は隅に置かれた姿見の前で立ち止まり、しばらく顔にかかる前髪をいじっていたが、やがて大きく息を吐くと振り向いた。

「じつは今朝方、電話がかかってきたんだよ。萌黄さんを命に代えても守れってね」

「わたしを……誰が」

いつしか萌黄の喉はカラカラに渴いていた。

「山寺鋭一。内閣総理大臣だよ」

総理が、アイドルに、直々に電話……???

萌黄とむんの目がテンになった。

「アレ、全然信用してないな。証拠を見せようか」

揣摩は尻ポケットから携帯を取り出すと、

「ウラン、総理の映像を出してくれ」

《ええ、どうしよっかな》

揣摩のPAIは“鉄腕アトム”の妹ウランちゃんだった。

「意外……」

萌黄がつぶやいた。

《しよがないなあ、ちよつとだけよ》

言うほど色っぽくはない。

ホログラフィ映像は、ウランちゃんのクネクネダンスから四角い画面へと切り替わった。画面の中央に現れたのは、見事なまでに剃り上げたスキンヘッドの男だった。口の周囲にくつきりとした黒髭をたくわえている。

「キャツ、ホンモノや。ホンモノの山寺総理や」

若い頃、政治活動をしながらデザイナーズブランドも立ち上げた山寺鋭一は、そのスマートなシルエットとセンスのいい身だしなみから、現在でも若者に人気がある。

「動いてる。通話の録画やね」

「静かに聞いてくれ」

執務室と思われる部屋をバックに、総理は机の向こう

から真剣なまなざしを向けている。

《……唐突な依頼で誠に申し訳ないのだが、神戸にいる君が位置的にも適任なのだ。君にはすぐ東大阪のK大学に向かつてほしい。保護してほしいのは、光嶋萌黄という女子学生だ。彼女はあるテロリストグループから命を狙われている。理由^{わけ}あつて警察を使うことはできないが、彼女の命に我が国の存亡がかかっている。確保したら速やかに添付した地図の場所まで連れてきてほしい。騒ぎになつては事なので、決して誘拐などという方法はとらず、彼女が自主的に同行するよう努めてほしい。情報によると彼女は君の熱烈なファンだそうだから難しくはないだろう。よろしく頼む……》

揣摩は一時停止ボタンを押した。

「信用してくれた？」

交互にふたりの顔を見比べるが、萌黄とむんは声も出ない。

「今まで黙っていて悪かったが――」

「どうして私の命が狙われてるの？」

萌黄は訊ねずにいらなかった。

「理由については、一切教えてもらつてないんだ」

「そんな」むんも横から加勢する。「いくら首相の願いやからって、理由も知らんとテロ絡みの危険な仕事を引き受けたっていうの？ 信じられへん」

揣摩は答えず、再び映像をスタートさせた。

《……この要請はトップシークレットだ。もし快諾してもらえない場合、機密を守るために君を逮捕、拘束することになる。当然、君の芸能生活は断たれることになるが、どうかそうさせないでほしい。そして日本国民の一員として、是非とも政府に力を貸してほしい。このとおりだ》

総理は立ち上がると、深々と頭を垂れた。これで終わりかと思っていると、総理は迷っているような素振りを見せ、再び口を開いた。

《私の一存で最後にひとつだけ教えておこう。揣摩君、君のご両親は北海道に住まわれていたね。数ヶ月前に起きた北海道消失事件、君の働き如何では、あの事件の謎が明らかになる可能性がある》

隣に座っていたむんが息を飲んだのが判った。

総理がもう一度頭を下げたところで映像は終わった。

揣摩は携帯をポケットにしまった。

「……………」

萌黄は手で額を押さえた。

（ついていかれへん。謎が謎を生むばかり——）

「質問は勘弁してくれよ。俺にも答えられないからね。

……それよりふたりとも、腹減ってない？」

質問攻めから逃げるように、揣摩太郎はそそくさと夕食の買い出しに出かけて行った。

萌黄とむんはしばらくお互いの考えを交換し合っていたが、情報不足は否めず、話はすぐに尽きてしまった。

ニユースを観ようとテレビのスイッチを入れてみても、アンテナをつないでないのか、砂嵐が映るだけだった。

「萌黄、目がとろーんとしてるよ。横になったら？」

「ん。じゃあ、ちよつとだけ」

「ウランちゃんかい」

ふたりはクスツと笑い合った。むんはバッグから御化粧ポーチを取り出して洗面所に行った。

長ソファに横たわった萌黄は、肘部に後頭部を乗せて目を閉じた。

雨戸がゴトゴトと揺れている。雨に加えて風が出てきたらしい。

（悪天候がテロリスト集団の邪魔してくれたらええのにな……）

雨音に耳を傾けているうちに、やがてスーッと意識が遠のいていった。

ザーザーザーザー。

ゴトゴトゴトゴトゴト。

カチャツ。

キィー。

夜の帳とばりよりもドス黒い影が勝手口から侵入してきた。

ひた……ズル……ひた……。

黒い影は足を引きずるように廊下を進むと、リビングの入口から中をうかがった。身体から落ちる水滴が床を濡らす。

「みつしま……もえぎ……」

影は地の底を這うような、うめくような声を発した。

「——むん？」

萌黄は寝ぼけ声で応えた。しかし部屋を覗き込む影に気づくと、弾かれたように跳ね起きた。

「誰!？」

影は黒光りする物体を持ち上げ、萌黄に狙いを付ける
と、間髪入れず引き金を引いた。

ドンッ。

萌黄は胸に激しい痛みを感じ、ソファから転げ落ちた。

5

（撃たれた——！）

衝撃を全身で受けた萌黄は床の上で身体をバウンドさせる
と、ソファの向こう、掃き出し窓に垂れた長いカー
テンのそばまで転がっていった。

（――息ができない！）

フローリングの床の上で横倒しになったまま、あまりの痛みに声を出すこともできず、目を開けることさえできない。

両手はやみくもに胸の辺りを押さえようとする。きつと血がドクドクとあふれ出しているに違いない。

（わたし、死ぬんや――砂になってまうんや）

脳裏に、砂と化した自分の姿が浮かんだ。

こんなワケのわからない死に方をするなんて――。

身体の節々が引き絞られるように痛む。

キーンという音が耳の奥底で鳴り続けている。

どこか遠くでキャツという悲鳴がした。

銃声を聞きつけ、暗い廊下を駆け戻ってきたむんは、逆光で立つ黒い影に思わず声を上げた。

影は振り向くと、むんに向かってためらうことなく二発目の弾丸を発射した。弾丸はむんの肩口をかすめるようにして廊下の壁に突き刺さった。

「動かないでください……あなたには関係ありません」
侵入者は厳然と言い放った。

その声は明らかに男だったが、どこか台詞を棒読みするような、妙なイントネーションを含んでいた。

むんは壁に張りついたまま、影の中の見えない顔を睨

みつけた。

侵入者は銃口をむんに向けたまま、リビングに足を踏み入れた。

照明の灯りが影の全身に降り注ぎ、侵入者はようやくその姿を現した。

若い男だ。

身長は揣摩太郎ぐらいか———そういえば揣摩はまだ帰ってこない。肝心なときにいないんだから！。

グレーのTシャツはシミだらけだし、同じくグレーのジーンズはあちこちがほつれて破れている。首にはなぜか大きな双眼鏡を紐で掛けており、後生大事に左手で押さえている。

髪といい服といい、履いたままの靴といい、雨でぐつしよりと濡れている。その濡れたTシャツが張りついた身体はこれ以上ないほど痩せて見える。

顔立ちは———水のしたたる前髪から覗く目は真ん丸なギョロ目で、げっそりした頬と相まって、思わずカマキリを連想させた。

男は、見ている間にもどんどん萌黄に近づいていく。

このままでは———。

むんは持っていたポーチに目を落とした。

「……とどめ……とどめを刺さなければ」

男はうわごとのように眩きながら、ソファの向こうでのたうち回る二本の足に近づいていった。

「すぐ楽にしてあげますから……」

しかし銃を持つ手は震えが止まらず、額には脂汗が浮き、奥歯がカタカタと音を立てている。

男は顔を左右に振って、汗とも雨のしずくとも判らない水滴を床にまき散らすと、あらためて両手で銃を構え直した。

「先ほど撃った弾は、あなたの胸に命中したはずですが、しかし私は最期まで見届けなければいけません。いけないのです……」

ごくりと生唾を飲み込んだ、そのとき、

「オイ！」

甲高い声が男に投げつけられた。

反射的に銃を向けた目に、何かが飛んでくるのが映った。男は思わず引き金を引いた。

ドンッ。

狙い誤たず、銃弾は物体を打ち碎いた。

しかし――。

物体に入っていた液体が、慣性の法則に従って男の顔に降り注いだ。目の中に液体が染み込んでくる。

「うわっ！」

むんが投げつけたのは、化粧水の瓶だった。

男が両手で顔を覆うと、むんはすぐさまダッシュで男に接近し、手刀で銃を払い落とした。

そして渾身の力を込めて男の股間を蹴り上げた。

「むぐっ」

たまらず侵入者は床の上に倒れた。

「男相手はこれが一番効くんや！」

むんは銃を拾い上げると、銃把を握りしめて侵入者に銃口を向けた。元より射撃の経験などない。

男は目を白黒させて、うなつたまま立ち上がることもできない様子だ。

どうしようかと迷っているところに、

「ただいまー。ちよつと一服吸ってたら遅くなっちゃったよー」

脳天気な揣摩の声が勝手口から帰ってきた。

「早よ来て！ 萌黄が侵入者に撃たれたんや！」

「えっ！」あわてて駆け込んできた揣摩は床に倒れている男を見ると「何者だ、コイツ」

「これ持って見張つというて」

言うのと、握っていた銃を投げ渡した。

「俺こんなもの撃ったことないぞ」

「撃たんでもええ！」

むんは残っていた怒りを揣摩にぶつけると、急いで萌黄のそばに駆け寄った。

しかしTシャツの胸元に開いた穴を見たたん、むんは激しい絶望感に襲われた。

6

耳鳴りはしだいに遠のいていった。と同時に、焼け付くような全身の痛みも嘘のように引いていく。

（これが天に召されるってことなんかな――）

無彩色だった萌黄の頭の中の風景は、いつしかピンクのもやに包まれていた。

（すべての苦しみから解放されて、魂が肉体を離れ、頭の上に輪っかを乗せて、ふわふわって浮き上がるんやろか）

痛みと入れ替わって身体の奥から湧いてきたのは、充足感とも満足感ともいえるような一種の快感だった。

（砂風呂にでも入ってるみたい。はあ～～～）

「どうなんだ、怪我の具合はひどいのかー？」

揣摩は手近にあったガムテープで手際よく侵入者の足首をグルグル巻きにすると、続いて両手を背中で縛り上げようとした。

「コイツなんで股間を押さえてんだ？ おいコラ、手を離せ。まったく世話を焼かせやがる」

侵入者の首を両膝で押さえながら、力づくで腕を揃えさせる。そうして手首を縛り上げながら、もう一度むんに向かっていらだつ声を放った。

「おい聞いているのか？ 出血はどうなんだ？ ひどいか？」

二度呼びかけられ、ようやくむんは我に返った。

（そや、今すぐ病院へ連れて行ったら助かるかもしれへん。もし銃弾が内臓をそれていたら――）

そう思うと、宙を漂っていた視線をあわてて親友の上に戻した。

（えっ？）

むんは信じられない思いで、萌黄の全身に目を走らせた。

（血の流れた跡が――ない）

じっさい穴の開いたTシャツにも、焦げ茶色のフローリングの床にも、赤い色は見あたらない。

（銃弾は、Tシャツを貫通して、そのまま身体に当たらずに飛び抜けた？）

「うふううう」

そのとき萌黄の口から声が漏れた。

（生きてる！ やっぱり外れて――なんて幸運！）

萌黄の声色は痛みに耐えているというより、気持ちよさげに聞こえた。

むんは萌黄の首の下に腕を回すと、ゆっくりと肩を抱き起こした。

「萌黄、萌黄」

むんはうれしさのあまり、涙と鼻水が頬を伝うのもかまわず、萌黄の身体を揺さぶった。

萌黄は目を閉じたまま、笑顔を浮かべている。

間違いない、無事だ！

コロン。

——異質な音がむんの耳を捕らえた。

床の上に転がり落ちたのは、鈍い光を放つ銀色の小さな金属のかたまり。

それは先端の潰れた弾丸だった。

いびつに変形した弾丸は、床の上では大して転がることもできず、蛇行するようにくねくねと転がると、すぐに動きを止めた。

むんは虫ケラでも見るように凝視していた。

（どうということ？）

ワケも判らず、抱き寄せた萌黄の胸に顔を近づける。

そこにはやはりぽっかりと、少し焦げた穴が開いている。萌黄の頭を膝に乗せたまま、彼女のTシャツをたくし

上げた。

そこには――。

赤く腫れた痕。軽い内出血。

それが左胸のブラの下、ちょうど心臓の辺りにあった。まるで『銃弾はココに命中しました』と主張するかのように。

いや、命中したのだ……はずなのだ。

「なんだよ、それ―」

突然、素っ頓狂な揣摩の声が間近でした。侵入者を縛り上げた彼はいつの間にかそばに来ていたのだ。目は萌黄の胸に釘付けになっている。

「ナニ見てんのよ、失礼でしょうが」

むんはあわてて萌黄のTシャツを引きずりおろした。

しかし揣摩は驚きの表情のまま、ロボットののように首を巡らせてむんを見つめると、同じ言葉を口にした。

「なんだよ、それ」

「わたしに訊かれても……」

揣摩は床に屈み、足許に落ちている潰れた弾丸を拾おうとした。ところが、

「アチチツ」

と叫ぶや手をパタパタと振り、のけぞりながら後退すると、長い足をもつれさせ、ソファの上に仰向けにひっくり返ってしまった。

その様子にむんは思わず吹き出してしまった。瀕死の重傷でもおかしくない萌黄が無傷と知り、脱力感を感じていたこともあるだろう。それにしてもこの揣摩という男はかなりおっちょこちょいらしい。見た目はたしかに二枚目ではあるけれど。

ソファの上にむっくり起きあがった揣摩は、指先を点検しながら、

「俺さ、以前ドラマで刑事役やったときに、防弾チョッキの上から銃を撃たせてもらったことがあるんだ」

言いながら顎で床の上を指し示す。

「そのとき弾丸がこんなふうに変形してたのを覚えてる。本当に着用して撃たれたら、命は助かるにしてもかなり大きな衝撃を受けるんだよ。アザになったり、ときには骨折することもあるって」

きつとそうなのだろう。キャッチャーが胸のプロテクターで剛速球を受け止めるのとはワケが違う。

「……彼女は見えない防具でも付けてるのか？ そんな話、あり得ないよな」

むんはおそろおそろ右手で、Tシャツ越しに萌黄の胸に触れてみた。

熱い——！

まるでストーブに手をかざしているようだ。

でも肌は……あくまでやわらかい。

まぎれもなく女性の弾力ある柔肌。アクション映画のヒロインのように割れた筋肉すらない。もつとも銃弾を跳ね返す筋肉などマンガの世界でもお目にかからないが——
——だとしたら、この状況はどう説明がつくのか？

萌黄は、まどろみから今ようやく覚醒しようとしていた。

7

瞼を開くと至近距離にあったのは、むんの泣きそうな顔だった。そして彼女の肩越しに覗き込んでいる揣摩のぽかんと開いた口。

萌黄は手足を伸ばして大きく欠伸をしようとした。しかしなぜか身体が思うように動かない。

「はえ、ふん、わらひふわふわ」

「アレ、むん、わたしフラフラ。そう言いたいんやね」
さすがはむん、すかさず解読した。

「はらだ、ひいれれう、ふちほうほはへん」

「からだ、しびれてる、くちもうごかへん、てか。——
もーこのコはニヤニヤしてからに、人の気も知らんとく。

……どこも痛いところないの？」

萌黄は身体じゅうの関節を動ける範囲で動かしてみた

が、何ら異常を感じなかったので、頷いて答えた。

むんは萌黄の両脇に腕を入れ、イヨツと掛け声一発、持ち上げると、そのまま萌黄をソファの上に座らせた。

くすぐったかったのか、萌黄の含み笑いが止まらない。
「気持ち悪いなあ。アンタ、銃で撃たれたんやで。覚えてる？」

「ふたえた？」

「ホラあそこに」揣摩が指で部屋の隅を示す。「犯人は動けなくしてある。もつともヤツを倒したのは俺じゃないけどね」

揣摩は床の上でくの字に横たわっている侵入者に近寄ると、その腕を掴んで乱暴に立ち上がらせた。そして萌黄たちと向き合うように反対側のソファに突き倒した。

「オイ、お前もあの迷彩服どもの仲間なんだろう。連中は外でお前の連絡を待ってるのか？　ン？」

侵入者の尖った顎をつかみながら、ドスの利いた声で尋問する姿は、刑事ドラマで主演した時そのままだ。

「……ち、違います」

後ろ手に縛られた侵入者は、必死の形相で言い返すが、声にまるで力がない。馬乗りになった揣摩にされるがままになっている。

「じゃあなんで萌黄さんを撃った？」

「……………」

「言わないと、こうだぞ」

揣摩は侵入者の指をつかんで、軽く捻った。

「うぐ、ぐ……言います」

「そうそう、最初っから素直にそうすりゃいいんだよ」
科白まで萌黄には聞き覚えがあった。本当にドラマを
観ているようだ。

「で、おたくの名前は？」

「……エリー」

（——エリー？）

それは、どうにか回転し出した萌黄の頭の記憶の片隅
をチクツと刺激した。どこかで聞いたような——。

「誰がニツクネームを言えつつったよ！ 名前だ、名
前！」

「……伊里江、です……伊里江真佐夫」

「イリエさんかい」

「伊東の伊、九十九里の里、江戸の江」

「あ————っ！」

尻を浮かせながら驚きの叫び声をあげた萌黄の身体か
ら、一瞬にして痺れが消し飛んだ。

「萌黄の知ってる人？」

むんの問いに、視線を侵入者に向けたまま頷く。

「エリーの伊里江さん。上から読んでも下から読んでも
エリーのイリエ」

それを聞いた揣摩は、泣き笑いのような顔で、

「その変態じみた名前を持つこの野郎は、萌黄さんの友達だってえ？」

萌黄はしかし首を横に振った。

「友達というか、メールフレンドなんです。本名は聞いたことがあったけど、互いにほとんどハンドルネームで呼び合ってたから、ずっとエリーさんって呼んでました。これまで一度も直に会ったことなんかなくて、これが初めてなんです。……この人があのエリーさんだとしたらですけど」

「……私そのエリーです……モエタン」

「——間違いありません……知ってるエリーさんです」
萌黄は消え入るような声で応えた。

「で、エリーさんはなんで萌黄さんの命を狙ったりしたんだ？」

揣摩は拳銃を持ち上げると、手の中でひらひらさせた。それを見た萌黄は背筋に冷たいものが走るのを感じた。

アレでわたしは撃たれた……どこを？

「……萌黄さんに恨みがあつたわけではありません」

腕と足は縛られたままで、きちんとソファに座らされた伊里江は三人に向かって話し始めた。彼の言葉遣いは至って丁寧だが、イントネーションはまるでたらめ

だった。棒読みのように抑揚がないと思うと、突然高く跳ね上がったりする。萌黄も彼の肉声は初めて聞いたが、吹き出しそうになるのを、むんと揣摩の真剣な表情に圧されて、なんとかこらえていた。

「……萌黄さんとは、数年前からメール交換をさせてもらっていました。ネット上の某プログラミング関係のサイトで知り合ったのですが、彼女の卓越した能力に興味を抱き、互いにアドバイスのやりとりを行うようになったのです」

「住所もやりとりしたの？」とむん。

「いいえ。ここ十年、ネット上のセキュリティは極めて堅固なものになりましたが、私のシステムをもつてすれば調べるのに雑作はありません」

「そんなことより、なんで萌黄さんを殺そうとしたんだよ！」

妙に落ち着き払っている伊里江の態度に、苛立ちを抑えられなくなった揣摩は、声を荒げて噛みついた。

「……前置き抜きで、いきなり本題ですか？」

「ああ本題だよ、核心だよ！」

揣摩は威嚇するように顎を突き出す。しかし伊里江はあくまで姿勢を崩さない。

「……萌黄さんが生きていては、困るのです」

「どういことだよ」

伊里江は悪びれたふうもなく、視線を前に戻すと、目を閉じ、そしておもむろに言い放った。

「……話すのは構いませんが、あなたがたに真相を受け入れるだけの覚悟はありますか？」

8

「覚悟……？」

萌黄とむんは互いに顔を見合わせた。

揣摩はといえば、拳を振り上げた肩がいきなり脱臼したような顔をしている。

外の風はさらに強さを増し、窓を覆う雨戸が煽られて、さつきよりも大きな音を立てて揺れている。

「……あなたがたが私の話に耐えられるかどうか」

伊里江は相変わらず一本調子でしゃべり続ける。

「こ、この野郎、大上段に構えやがって。そんなの聞いてみなくちゃ判らないじゃないか！」

揣摩は吠えるが、伊里江は一瞥をくれただけで、表情は固い氷のようにびくともしない。

「……その通りですね。私の問いかけは無意味でした。こうして虜とりこになってしまつては、今さらどんな言い逃れもできないでしょうし」

「当たり前だろうが。お前、自分のやったことがどんな

ことか判ってんのか！」

「待って」むんが手を挙げて揣摩を制した。「この人に話させましようよ」

揣摩は不満そうに喉を鳴らしたが、肩をすくめると大仰な仕草でソファに背をもたせかけた。

伊里江は何ごともなかったように再び口を開いた。

「……まずは、萌黄さんに質^{ただ}すことがあります。

萌黄さん、右手を挙げてください」

突然、自分に向けられた要求に、萌黄は考えるより先に右手を小さく挙げていた。

「それは左手じゃないか。関西は右と左が違うの？」

雰囲気に吞まれまいとしてか、揣摩は軽口をとばした。しかしむんは昨日萌黄から聞いた話を思い出したのだろう。ハツとした表情になった。

「……今度は、他の二人にも右手を」

むんはおそろおそろ、揣摩はふてくされ気味に挙手する。それは両者とも“左手”だった。

伊里江は初めて、口の端をわずかに動かし、満足そうな表情を見せた。

「……続いて萌黄さんに確認します。昨日の朝、あなたの身にとんでもないことが起きましたね？」

萌黄はすでにその質問を予期していた。この人は知っている。昨日、わたしに起きた驚天動地のできごとを。

「エリーさん、あなたは全部知ってるんやね」

「……もちろん」

彼は頷いた。今度は明らかに微笑みを浮かべて。

「コラ、侵入者。置いてけぼりは困るぜ。ちゃんと俺にも理解できるように説明しろよ。今の手を挙げる実験にはどんな意味があつたんだ？」

しかしそれに応えたのは萌黄だった。

「揣摩さん、わたしの身に起きたことっていうのは、その……信じてはもらえないと思うんですけど、右と左がこう反対に入れ替わってしまったんです」

「へ………？」

「昨日の朝、目が覚めたら、まわりにあるものすべてが鏡に映したみたいになってて」

「………」

揣摩は顔をゆがませると、付き合いきれないと言わんばかりに席を立った。

「揣摩さん！」

「ごめん、俺ちよつと、他の部屋でアタマ冷やしてくるわ」

そう言つてドアの方へ歩き出した揣摩の足を、伊里江の次の言葉が止めた。

「……萌黄さん、あなたのような人を連中は“リアル”と呼んでいます」

「――！」

不自然な立ち止まり方をした揣摩は、振り向くと自分を注視している伊里江と目が合った。

「……揣摩さん、あなたは萌黄さんがリアルであることを、最初から知っていましたね？」

「違う！　俺は頼まれて彼女の髪の毛を渡したただけで、その結果、リアルだと教えられた……だけで……」

いつの間にか三人の視線を一身に浴びていることに気づいた揣摩は、語尾を濁したが、もはや手遅れだった。

「髪の毛って？」

むんが低い声で疑問を投げつける。

揣摩は立ったまま、がつくりと肩を落とした。

「……フム」伊里江はそんな揣摩の態度も目に入らないかのように話しかける。「二人に説明してください」

揣摩はぎゅつと目を閉じたまま、ぎこちなく首を左右に振った。そしてゆっくりと床に膝をつくと、

「申し訳ない。――彼女がリアルかどうか判定するのに、最低でも髪の毛が一本必要だというので、彼女に気づかれないよう拾い上げてハンカチにくるみ、マネージャの柳瀬に手渡ししました。柳瀬はそれを総理の連絡員らしき人間に手渡し、最終的に俺の知らないところで判定がなされたようです。」

――萌黄さんはリアルであると」

「それってDNA鑑定みたいなもんやないの？ 明らかに人権侵害やんか！」

むんが容赦なく非難の声を浴びせる。神妙にうなだれている揣摩。それはかつて萌黄の見たこともない超アイドルの意外な姿だった。

それでも萌黄は不思議に怒りというものが湧いてこない。状況説明ばかりで、話の大筋が見えないこともあるが、すべてが夢物語のような気がするせいでもある。

増えるばかりの謎に対する思いはむんも同じだったらしい。業を煮やした彼女は伊里江に向き直ると、強い口調で詰問した。

「なんであなたは揣摩さんが隠していたことが手に取るように判ったの？」

——いえ、そもそも、あなたはいったい誰？」

9

「……きちんとした自己紹介がまだでしたね。ご希望なら話しますが、その前に——」

伊里江は顔をしかめると、上体を前に折り曲げた。

「何か食べさせてくれませんか？ じつはこの三日間、何も食べてないのです」

なるほど、彼のやつれた顔や覇気のない動きは、それ

が原因だったのか。

「うーん、しゃーないわね」

組んだ脚の上で頬杖をついていたむんは、ため息をひとつ吐くと、揣摩に向かつて、

「コンビ二で買ってきたものを食べさせてあげてよ」

すると揣摩は、萎^{しお}れていた花が急に息を吹き返したように、

「よしきた！」

と威勢よく立ち上がった。部屋の隅に転がしたままのビニール袋を持ってくると、三人の前でにこにこ中身を開陳した。テーブルの上にはとても食べきれないほどのパンや菓子類が山積みになされた。

「買いすぎ……」

「この時間帯じゃ弁当類はほとんど残ってなかったんで、菓子パンとおにぎり中心に買ってきたよ。あとドリンクはこちら」

言いながらテキパキと箸や紙おしぼりを配る姿は、じつに自然でかつ堂に入っている。芸能雑誌などでも、撮影現場における彼の評判がすこぶるいいという話はよく読む。トップアイドルなのに、プライドにこだわらないというか、人当たりの良さは生来のものなのだろう。

「彼の手だけ、ほどいてあげてよ」

むんの言葉に揣摩は渋い顔を作ってみせたが、伊里江

の後ろに回ると、腕を縛っていたタオルをほどいた。

伊里江は自由になった両手を前に回し、青くなった手を軽く振っている。そんな彼にむんが釘を刺した。

「今さら逃げたりしないとは思うけど、もし変な動きを見せたら、揣摩さんが黙ってないからね」そして揣摩に笑顔を向ける。「ねえ、揣摩さん？」

「おう、そのとおり！」

失地回復のチャンスを得たとばかりに、傲然と胸を張って伊里江に睨みを利かす。

萌黄は驚くばかりだった。むんは今日会ったばかりの揣摩の本質をすでに見抜いているばかりか、あまつさえ彼を操縦すらしてみせた。揣摩が想像以上に単純だということもあるが。ファンが知ったら非難の嵐が吹き荒れるだろう。自分もファンのひとりだけだ。

萌黄の知らないむんがそこにいた。

しばらくは食事タイムとなった。

伊里江は、空腹が嘘でないことを証明するように、ものすごい勢いでパンにかじり付いた。それを啞然として眺めながら、萌黄もむんもメロンパンを頬ばる。揣摩だけが場の緊張を和らげようとしてか、しゃべり続けている。

「教えてもらった駅前のコンビニ、二十四時間営業って

書いてあるのに閉店の準備してたんだよ。店員に訊いたら、この辺り一帯は警戒中だから注意するよう警察に言われたらしい」

せわしなく食べながらも会話は途切れることがない。これもスケジュールびっしりの一流芸能人ならではの技かと萌黄は思う。

「学園前駅って、特急が停車する駅だろ？ 宵の口ならもう少し賑やかそうなもののに、シーンとしてんだよ。——救急車だけはひっきりなしに走ってたけどね——駅員にそれとなく尋ねたら、電車も止めてるんだとか。俺たちが踏切で遭遇した車輛、乗客の姿がなかったことに気づいてた？ あれは回送車だったらしいぞ」

今度はおにぎりに手を伸ばす。話していても唾や米粒が飛んでこないのが不思議なくらいだ。

「柳瀬からさつき電話があつたんだ。まだ警察署の中に留め置かれていて、依然身動きがとれないらしい。困ったもんだ。あの車があれば逃げるのも楽なものにな。」

彼が署内で小耳にはさんだ情報によると、パトカーや萌黄さんを襲った迷彩服の連中、どうやらアイツらは現場からアツという間に逃げ去ったらしい。でもまだこの辺りに潜んでる可能性があるんで、念のために非常線を張っているって話だ」

「警察では、迷彩服が萌黄を、と？」 むんが尋ねる。

「ああ、パトカーから誘拐されたと考えてるらしい」

「――あの」久しぶりにに萌黄が口を開いた。「パトカーにいつしよに乗っていた警部さんたちは？」

揣摩の咀嚼^{そしゃく}が一、二秒止まった。そしてまた動き出した。

「その後、パトカーの中には、人型の砂が四体確認されたという」

萌黄は面を伏せた。

あの人たちは自分を守ってくれようとしていた。でもそのために殺されてしまった。わたしみたいな者のために……。

「俺、思うんだ」揣摩が買ってきた食料の半分近くを平らげたところで、こう切り出した。「警察の見解と違って、実際には萌黄さんはヤツらに捕まってはいない。ということとは、連中はまだこの辺を捜そうとしているに違いない。警察の警戒の目をかいくぐって、再度やってくる可能性はあるとみた方がいだろう」

むんもその意見には素直に頷く。

「そうね。わたしも早くここから離れるのが得策だと思う。でも……逃げるにせよ、どこに逃げればいいのか、ううん、その前に知っておきたいのは、なぜ萌黄が狙われてるのかってことよ」

むんは食事をペットボトルの麦茶で締めると、伊里江

に向き直った。

「この人の話を聞けば、そこらあたりがハッキリすると思うねん。——さあ、食べるのはそれぐらいでいいんじゃない？ そろそろ話してもらいましょうか？」

10

伊里江は、三個目のあんパンを、最後の一切れまで口に入れると、喉を鳴らしながらコーラをあおり、いかにも満足といった感じでソファにもたれた。

それでも大事な双眼鏡は、食べている間も首から外さなかった。

「オイ、自分の食った分はちゃんと払えよ」

揣摩が眉をくもらせて迫る。

「……私に話しかけたのですか？」

「当たり前だろうが。他に誰がいる」

「この人たちが」と、萌黄とむんを指さす。

「アホか。彼女らは友達だからいいの」

「私は違うのですか？」

「俺には犯罪者を友達にする趣味はない！」

激する揣摩とは対照的に、伊里江はあくまでマイペース。シリアスな顔を崩さない。

「揣摩さん、わたしの分はちゃんと払いますから」

と、むんが口をはさむ。

「あーもー、チャチャ入れないでくれよ」

揣摩は自分の長髪を荒々しく手櫛^{てぐし}で梳^すく。何度もそうしているから、だんだんボサボサになってきた。

「とにかくこれじゃ話が進まないや。俺は黙ってるから、むんさん、司会進行を任せますよ」

「馴れ馴れしいわ。舞風さんって呼んで」

「——美人なのに、いちいちキツイよなあ」

何気なく放った揣摩の言葉が、萌黄の中に小さな鉛の重しを落とした。

むんとふたりでいるとこういう場面によく出くわす。

母がそうだったし、近所のおばさん連もそうだった。みんな口を揃えて『むんちゃん、また綺麗になったんちゃう?』と誉めそやす。

昔はそれでも誇らしく思っていた。今でもそれは変わらないが。

むんは自慢の親友であり、うれしいときには共に喜んでくれ、悩んでいるときには的確なアドバイスをくれる。互いに切磋琢磨しあえる存在。……わたしのほうがお世話になりっぱなしだけど。

最近つい思ってしまう。むんを賛美する人って、横にいるわたしと比較してるんじゃないかな、と。

そうかもしれない。きつとそうだ。

だから時たま、複雑な心境に陥ることがある。

今みたいに、あこがれの揣摩さんにまで言われてしま
うと、なんかちよつとみじめだ。

（——いや違う。みじめなのは、ウジウジこんなことを
考えてる自分だ。こんな時に……ああ情けない）

その揣摩は、無言で伊里江の背後にまわると、再び彼
の両手首を後ろ手に縛り上げた。

「本名は、伊里江真佐夫さん、でしたね」

「……そうです」

むんの訊問が開始された。萌黄は頭を降って、もやも
やした考えを払拭する。

「年齢は？」

「……二十三歳です」

意外に若い。雨に降られて、煤けた髪もボロボロの衣
服もズブ濡れのままだから、年齢を類推するのに困難で
はあったが。

「職業は？」

「……研究者、と言いたいところですが、現段階ではプ
ログラマーの端くれです」

「萌黄が生きていると困るって言うたね。彼女を撃った
理由は？」

さらりと核心に入った。萌黄は息を飲んで成り行きを
見守る。

「……萌黄さんは“時限爆弾”なのです。だから早期に解除する必要があります」

「????」

「……もし、このまま萌黄さんが生き続けていると、いずれ、この世界は崩壊します」

「——この世界って、つまり日本？」

「……いいえ、私は誇張して言っているではありません。文字どおり、この世界全体です」

むんは絶句した。何を言い出すのかこの男は。そんな顔をして萌黄に顔を向けると、ひょいっと肩をすくめて見せた。

わたし達は狂人を相手にしているのかもしれない。

「……あなたは、北海道が消滅した事件を知ってますね」

いきなり話題が飛んだ——ように感じた。

「もちろんよ」

「……あれはたったひとりの人間が“時限爆弾”にされて起きた事件なのです」

「——！」

いきなり度肝を抜かれた。

「ちよつと待って！ あの事件は“人災”なの？」

「……そうです」

頭をハンマーで殴られた思いとは、このことだ。特に

むんと揣摩は家族が被災している。驚きは萌黄の及ぶところではないはずだ。

「……事件は、ひとりの科学者によって引き起こされました」

「な、なんのために！」

横合いから揣摩も訊ねずにはいらなかった。

「……警告です」

「警告——」

「……要求を飲まなければ、今度は一大陸や一国家どころか、この世界ごと消滅させるぞ、という」

伊里江は淡々と言葉を続ける。

「……そして警告は無視されました。だから昨日の朝、この世界を消滅させる “時限爆弾” のスイッチが押されたのです」

11

むんはソファの背もたれに身体を沈めた。伊里江をすぐ横で監視していた揣摩は、洩面を浮かべて腕を組んだままだ。

ふたりとも明らかに当惑し、疑っている。伊里江が正常な人間なのか否かを。そして、これ以上、話を聞くことに意味があるのかどうかを。

萌黄にしても、伊里江の話す内容は、あまりにも荒唐無稽であり、とてもじゃないが素直に受け入れることはできそうにない。

（でも——わたしには彼が嘘をついているようには思えない）

直感である。

彼との間でメール交換を始めたのは、今から二年半前。今日まで顔を合わせる機会がなかったが、週に二、三通はコンスタントにやりとりしていた。

内容はコンピュータのシステム構築についてや、具体的な設計プログラムに関するものばかりだった。伊里江は次世代ネットワーク、萌黄はP A Iの更なる進化と、興味の対象は全く異なっていたが、なぜかふたりは馬が合った。

伊里江の文章には、冗談や軽口など一切なかった。常にパソコンのマニュアル並に硬い言葉で書かれており、時候の挨拶はおろか「こんにちは」「さようなら」すらなかった。当初、萌黄は面食らったものの、慣れると体裁を気にする必要がないため、気が楽になった。人見知りの萌黄が、メールだけの付き合いとは言え、これだけ長続きしたのは、そのせいかも知れない。

彼の文体は常に簡にして要を得ていた。誇張もなければ曖昧さのカケラもなかった。

その彼が初めて萌黄の前に姿を現したのだ。

話し方もメールの文体そのままに。言葉遣いは一見丁寧だが、尊敬語も謙譲語も使わないところまで同じで！

だから——なのだ。

彼の話に真実味を感じてしまうのは。

いや、きつと真実なのだろう。少なくとも彼はそう信じていることは確かだ。

だが——もし、彼にとって話したくないことを尋ねられた場合、どういう受け答えをするのだろうか？

「えっと、質問を続けます」

間を取った後、むんはあくまでも冷静に、訊問の再開を宣言した。揣摩は、伊里江の話をデタラメと決めつけることにしたらしく、苦笑を浮かべながら、買っておいた飴をポイと口の中に放り込んだ。

「まず、北海道を消滅させたカラクリについて、説明して」

「……判りました」

伊里江は拘束された両手両脚を動かして、居住まいを正した。話は長くなりますよと言わんばかりに。乗せられて、むんと萌黄も座り直す。揣摩はソファにだらしく横座りしたまま、ニヤニヤと伊里江の顔を見上げている。

「……今から十年前、アメリカの大学で核物理学を研究していた日本人科学者が、日本のとある大学に教授として招かれました。

……当時、二十代半ばだった彼は、物理学界の俊英として世界的にも大きな期待が寄せられる存在でした。

……大学側は研究設備など、環境や予算についても破格のものを用意し、彼には自由な裁量権を与えられました」

伊里江の声が、モデルハウスのリビングに響く。

相変わらず抑揚に乏しいが、飛び跳ねるような聞きづらいイントネーションは影を潜めた。

「……彼の研究テーマは、ブラックホールの形成過程の仕組み」というものでした。

……日本の大学に移った三年後、彼は、研究室で最初のミニ・ブラックホールの“生成”に成功しました。宇宙のブラックホールがどうやってできるかを探っているうちに、本物のブラックホールを生み出してしまったのです。

……一般の人にとっては、ピンとこない話でしょう。しかしそれは大変なことなのです。宇宙の神秘の一端を解明していたはずが、神秘そのものを作り出してしまったのですから」

思い出した。ずっと昔、テレビの特番で、司会者の男が「ブラックホールが、なんと日本で生まれました！」と叫んでいたのを。

「……ブラックホールと聞いて誰もが連想するのは、光さえも吸い込んでしまうほど強烈な重力を持つ、真っ黒な星——でしょうか。

……一九七〇年代、『はくちよう座X—1』が第一号と目されて以来、数多くの研究者を魅了してきたブラックホールですが、その実体は、二十一世紀を迎えた後も不明な点だらけでした。したがって、彼のグループが研究室でブラックホールを生成したというニュースは、当初、悪い冗談と受け止められました。

……しかしながら、彼が自らの研究成果を学会で発表し、研究室——それは巨大な真空装置で、小型宇宙を模した空間をシミュレートできるものでしたが——の中で、公開実験が行われるに及んで、失笑や非難の声はすぐに驚嘆と歓声へと変わりました。

……あり得ないと否定してかかった物理学の権威や重鎮たちも、光はおろか、あらゆるものをその小さな空間に吸い込んでいくさまを間近で見せられると、しぶしぶ認めざるを得ませんでした」

気のせいかな、伊里江は少し遠い目になり、弁舌が熱を帯び始めた。

「……彼はすぐにも成果を論文にまとめ、広く公表するつもりでいました。ところが――」

12

伊里江の言葉が途切れた。

萌黄が顔を上げると、彼は自分の首からあげた双眼鏡に目を落としていた。

どうしたんだろう。頭の中を整理しているのだろうか。俯いた顔には、どんな表情も浮かんでいない。

息詰まる沈黙の中、辛抱強く待っていると、やがて伊里江は話を再開した。

「……私は、物理学については門外漢です。だから理論に関する質問をされても、答えることはできません」

もとより萌黄には何を質問すればいいのかも判らない。ただ無言で頷くだけだった。

しかし記憶に間違いがなければ、実験室でのブラックホール生成という画期的な“発明”の顛末は――。

「……ニュースが世界を駆けめぐるとすぐ、さまざまな方面から、彼の研究に関する問い合わせが殺到しました。……最初は主として、天文学者や核物理学者でしたが、やがて企業や環境団体からのものが多くなり、二日後にはそれらの代表と名乗る人間たちが、研究所の入口に列

をなすようになりました。

……彼らの狙いは、ブラックホールが放射する高エネルギーでした」

「高エネルギー……」

むんが呟き、伊里江は、そうだと頷く。

「……ここで『天然』のブラックホールについて述べておく必要があるでしょう。

……夜空に浮かぶ星が目視できたり、望遠鏡で観測できるのは、星自体が光を放っているからです。つまり星はすべて太陽なのです。

……その太陽が年を取って、自分自身の重力で潰れ、その結果できるのがブラックホールです。ブラックホールになると、光でも何でも、近づくものはその強大な重力によって引きずり込んでしまいます。つまり、ブラックホールを発見しようと思って天体望遠鏡をいくら覗いても見ることはできないのです。

……にもかかわらず、ブラックホールと思われる天体が発見されたのは、そばに別の太陽があったからです。

……我々の太陽系は一個の太陽しか持っていないませんが、連星つまり複数の太陽がペアになっている状態は、宇宙ではそう珍しくありません。そんなペアの片方がブラックホール化すると、当然もう一方の太陽が発するガスは引き寄せられます。引き寄せられたガスはブラックホー

ルの周囲を円盤状に回転し、摩擦で回転が弱まった内側から徐々に奈落の底へと落ちていくのです。

……我々は、そのガスの動きによって、初めてそこにブラックホールがあることに気づくのです。

……さて、すべてを飲み込むブラックホールですが、じつは同時に、プラズマのジェット噴流を放射しています。それは吸い込んだガスの重力エネルギーが開放されたものといわれており、莫大なエネルギーを生み出しています」

壮大なスケールの話に、萌黄もむんもいつしか身を乗り出していた。揣摩さえ、皮肉な笑みを引っ込めて、静かに耳を澄ましている。

「……研究室で誕生した、人工のブラックホールも、それだけでは目に見えません。背景が歪んで見える程度です。そこで僅かなガスを吹きかけてみたのです。

……次の瞬間、猛烈な勢いでプラズマの噴流が発射され、真空装置を破壊し、研究所の分厚い壁に巨大な穴が空いてしまいました。

……与えたエネルギーを数億倍にして返すブラックホール。原理は未だ解明されていませんが、その価値は計り知れないものがあります」

そのとおりだ。現在の地球が抱えるエネルギー問題を、根こそぎ解決できるんじゃないだろうか。

「……先ほども言いましたように、ありとあらゆる人間が、この人工ブラックホールに吸い寄せられ、その生成原理を、発生装置の仕組みを知りたがりました。中には国家予算の半分を提供しようと申し出た中東の国もあったと聞きます。」

……人工ブラックホールの技術を独占し、軍事利用できれば、世界を征服することだって可能でしょう。そう考えた人間がいたとしても不思議ではありません」

萌黄の背中を、冷たい汗がしたたり落ちた。

「……彼の身の安全を守るため、S Pが配置されました。すでに数度の誘拐未遂が発生していたためです。それだけならまだしも、暗殺を予告する宗教団体まで現れる始末でした。そうなると一転、人々の彼を見る目はだんだん厳しくなり、平和を脅かす“悪魔”と罵る輩やからも増えてきました」

伊里江は唇をなめると、耳を傾ける三人の顔を順番に見回した。

「……ある日、彼はとうとう決断し、実行しました。」

……S Pに見つからぬよう、深夜、研究棟に隣接した寮を抜け出すと、研究室にひとりで潜り込みました。そして実験装置を破壊すると、すべての研究データを消去したのです。——彼はそのまま、いずこへともなく行方をくらましました。ただひと言、メモを残して。

……そこにはこう書かれていました。『私が作ったのは、ブラックホールとは似て非なるものであり、実験は失敗だった』と。

……その後、世のブラックホール騒動は一気に静まりました。彼は「食わせ者」の烙印を押され、いつしか人々の記憶から忘れ去られました。

……ですが、彼は食わせ者などではなく、本当に人工ブラックホールは生成されたのです。

……彼の夢はもちろん平和利用でした。

……有効に活用すれば、食糧問題やエネルギー問題が一掃されるはずだったのです。

……彼はそんな明るい未来を心に描いて、日々研究にいそしんでいたのです。なのに――」

伊里江は沈黙した。

萌黄はすっかり思い出していた。小学生の頃、そんな騒ぎが確かにあった。嘘をついたり、人を騙したりすると「ブラックホール！」と呼んだりするのも、一時流行した。

むんは俯いた伊里江に、優しい声で尋ねた。

「あなたは どうして彼の真意を知ってるの？」

その問いに、伊里江は震えを帯びた声で答えた。

「……彼、伊里江真佐吉^{まさきち}は、私の実の兄なのです」

（エリーさんのお兄さんが、人工ブラックホールを発明した人……）

萌黄は、この日、何度目かの驚きを味わっていた。

意外なところで話がつながった。七年前に世間を騒がせたマッド・サイエンティスト（と今まで思っていた）、その実弟が伊里江だとは。

「古くさい名前だな。『マサキチ』だなんて」

揣摩がボソツと漏らすと、伊里江は目を細めて彼に視線を注いだ。

「揣摩さん！」むんが諫める。

手を挙げた揣摩は、プイとそっぽを向いた。

ややあつて、伊里江は失踪後の話を語り出した。

「……兄の真佐吉は、私のたったひとりの肉親でした。兄が日本に戻ったとき、私もいつしよに帰国しました。しかし私は日本の学校に馴染むことができず、兄の寮で家庭教師を相手に勉強していました。それでも勉強時間が終わると、すぐさま研究室に飛んでいき、兄のそばでコンピュータをいじっていたのですが。」

……そう、私たち兄弟はいつもいっしょだったのです。

……あの決断の夜、私たちは夜陰に乗じて研究所を後にし、大学のある仙台を脱出しました。そして今日まで

逃亡の日々を過ごしてきたのです」

「えっと——七年間も？」

「……十ヶ月後には、落ち着ける場所が見つかりました。しかし、日本各地を転々とするあいだ、言葉では尽くせぬ苦労を経験しました。それを兄と力を合わせることで、どうにか切り抜けてきたのです。

……私が逃げるときに持ち出したのは愛用のノートパソコンだけでした。兄も自分のマシンを——。それ以外は互いに着の身着のまま、お金も大して持っていないくて。銀行預金は、足がつく危険があるため触ることができないし。

……私は愛機を駆使して銀行のサーバーに侵入すると、架空の口座を作り、目立たぬよう、よその金を流し込み、逃亡の軍資金としました。しかしいつもうまくいくわけではなかったので、兄はたどり着いた町で、アルバイトや日雇いの仕事に就きました。しかし慣れないことの連続で、並大抵の苦労ではなかったようです。そんな時、私は安ホテルの部屋の隅で、彼の帰りを待つだけでした。……仕事で疲れた夜も、兄は自分のマシンに向かい、研究を続けていました。データは施設を捨てる際、すべて彼のマシンに転送していたので、可能だったのです。

……彼は希望を捨てていませんでした。彼の意志に賛同する者が現れたら、喜んで研究成果を提供するつもり

でいました。

……しかし現実には、我々の前に現れたのは、味方ではなく敵でした。彼が残した言葉は偽りであると看破した連中が、我々の後を追いかけてきたのです。

……連中はどこまでも執拗でした。兄と私は幾度もギリギリのところまで、連中の追跡の手を逃れました。

……ひ弱な私とは違って、兄は常に矢面に立って血路を切り開いてくれました。私はただただ庇護されるばかりの存在でした。それでも彼は「私のためにこんなことになって申し訳ない」と口癖のように言っていました。

……十ヶ月後、我々は心身共にボロボロになりながらも、ようやく小さな離れ小島に落ち着き先を見つけることができました。

……我々は住む者のいなくなった村の一軒家を改装して隠れ家としました。幸い、近くで漁師を営んでいる気のいい老夫婦が我々に好意を寄せてくれ、食料などを分けてくれました。衣服も彼らの子供のお下がりをもりました。

……温暖な風に吹かれる隠れ家での生活は、不自由な点も多々ありましたが、逃亡生活に比べれば天国でした。パソコンの電源は自家発電で供給しました。ネット接続も公共衛星を密かにハッキングすることで可能にし、世の動きを探る態勢だけは確保できました。

……私はまだ幼かったせいもあり、環境への適応能力が高かったようです。昼間は島じゅうを駆けめぐったり、木の実や薪を集めたり、数少ない動物と戯れたりして遊ぶことを覚えました。

……逆に、兄は隠れ家の奥、陽も差さない部屋に籠もることが多くなりました。笑うことも少なくなり、私との会話も激減しました。ときたま口を開くと出てくるのは、世の中への恨みつらみでした。そして「真佐夫を一生こんなところに閉じ込めておくわけにはいかん」と、そればかりを繰り返していました。そんな冷え切った兄の心を温めたいとは思いましたが、私にはどうすることもできませんでした。

……それでも彼は研究を続けていました。彼がどんな思いで続けていたのか、私には想像することもできません。

……しかし、ある日、彼は私を置いて、単身、島を出てしまったのです。一通のメッセージを残して。

……そこにはこう書かれていました。

……『決着をつけてくる』——と』

「……彼がそこまで思い詰めていることに気づかなかっ

た私は、自らを大いに恥じました。

……すぐに船着き場に行ってみましたが、あるはずの舟はどこにもありません。早朝の暗いうちに発ったのでしょう。

……引き返して彼の部屋を点検したところ、身の回りのものと彼専用のノートパソコンが見当たりませんでした。早速メールを打ってみました。待っていても返事は来ませんでした。

……島を出て彼の後を追うことも考えました。しかし彼がどこに向かったのか、手がかりさえ残されていない。かつたので、泣く泣く思い止まりました。せめて返信のメールが来れば逆探知できたのですが」

「メールで場所を特定するなんて可能なの？」むんが尋ねる。

「……はい。発信後数分以内なら八十パーセント以上の確率で、痕跡も残さずに特定できます」

「三年前、GPSのハッキングによるアリバイ偽装事件が起こってから、どの通信会社も『こっそり他人の居場所を知るのは不可能』を謳い文句にしているけど？」

「……私に破れない壁はありません。私より有能なハッカーは、この世に存在しないでしょうから」

伊里江は平然と言い切った。横で揣摩が鼻白んだ顔をしている。

「……と、これは言い過ぎました。私に比肩する人間がいるとすれば、それは萌黄さんでしょう」

揣摩は、あらためて萌黄の顔を別人でも見るように、しげしげと眺めた。

「萌黄さん。キミって、そんなスゴい人だったの？」

萌黄は、とんでもないと、首を激しく横に振った。

伊里江は気にせず話を続ける。

「……数年前、私は自らのサイト『アルカトラズ』を立ち上げ、ゲーム大会を企画しました」

「名前は聞いたことある。難攻不落の刑務所やったとか——」むんが独り言のように呟く。

「……はい、サンフランシスコ湾に浮かぶ米連邦刑務所です。名前はそこから取りました。私の方で極めて堅固なセキュリティシステムを持つ仮想の城を構築し、これを誰が一番先に侵入して、指定されたデータを盗み出せるか、というのがゲームの趣旨でした。

……その大会の第一回、第二回の優勝者が萌黄さんなのです」

「はああ——それは、つまり、コンピュータの能力を競うようなものか？」と揣摩。

「……まあそうですね」

「たまげたなー。俺なんざワープロだけで精一杯だから、理解を超えてるわ。むんさん——舞風さんは？」

「萌黄から聞いてたけど、わたしにも詳しいことは判らへん」

「でも」揣摩は伊里江に顔を向ける。「第三回以降、萌黄さんは優勝できなかったのか？」

「……いいえ、抜群のIT能力を持つ彼女は、以降、企画側つまり私と共に城の防備を固める側にまわったのです。残念ながら第三回以降には、ゴールにたどり着く人間は現れず、五回で終わりにしました。」

……私と萌黄さんが頻繁にメール交換するようになったのは、これがきっかけだったのです」

ますます目を丸くする揣摩の視線に、萌黄はどんどん縮こまっていく。

頬が痛いほど火照っている。彼女は人の注目を浴びるのに慣れていない。生来の引込み思案だし、それゆえ秀でた才能を社会で活かそうと考えたこともない。母親には「せめて情報処理の資格でも取ればツブシがきくのに」と嫌味を言われたりもした。

「……話を戻します。」

……その後ひとり、島に残された私は、ひたすら兄からの連絡を待っていました。ネット上のニュースは逐一チェックし、彼が逮捕されたというニュースが報道されれば、いつでも島を出られるよう準備は怠りませんでした。

……しかし、警察のサーバーに侵入しても、彼の目撃情報すらなく、行方は杳として知れません。

……そうして待ち続けること二年。ようやく彼からのメールが返ってきたのは、今年の春でした。

……『準備は整った。ニュースを見ていなさい』。冒頭はそんな書き出しで始まっていました。『ある場所に人工ブラックホールを仕掛けた。これはデモンストレーションだ。連中は、私が本気であることを思い知るだろう』と。

……三日後、北海道が消えました」

「な、なんだと！」

揣摩は立ち上がると、伊里江の首を両手で掴んだ。

「お前の兄貴は、そんな個人的な恨みを晴らすため、俺の両親を虫ケラみたいに殺したっていうのか！」

叫ぶや、揣摩の拳は伊里江の顔を殴り飛ばした。

15

殴られた伊里江は、衝撃を受けきれず、頭を下にして床に転げ落ちた。手足を縛られているから受け身もとれない。側頭部をしたたかに打ち付けると「ぐぐっ」とうめき声をあげた。

「この野郎、逃げられると思うな！」

身動きができないのだから、逃げられるわけではないのだが、頭に血が上った揣摩は、意味不明な罵声を浴びせながら伊里江の腹を蹴り上げる。

「揣摩さん、ダメッ！」

萌黄は本能的に叫んでいた。

「怪我したら、砂になってしまう！」

二発目の蹴りを入れようとした揣摩の足が止まった。

「砂に……」

彼の足許で顔を上げた伊里江の口の端から、一筋の血が床にしたり落ちた。それを見て揣摩は後ずさりした。あわててむんと萌黄は伊里江のそばに駆け寄った。

「……大丈夫です。私は砂になったりしませんから」

伊里江は荒い息のなかで弱々しく笑った。

むんはティッシュで血を拭うと、萌黄と協力して伊里江を抱え上げ、ソファに座らせた。見た目以上に軽い。

その間、揣摩は壁際で立ちすくんでいた。初めは作り話と笑っていたのに、これほど過敏な反応を起こしたところを見ると、彼も伊里江の話を信用し始めているのだろう。

揣摩は前髪を掻き上げると、独白めいた口調で呟いた。「俺の実家は北海道の旭川市郊外にあったんだ。あまりに刺激のない町で、小さい頃は好きになれなかった。でも上京して初めて理解できたよ。故郷って俺の肉体の一

部なんだとね。だから反撥ばかりしていた両親に、いつか、でっかい孝行をしてやろうと思っていたのに――」

心なしか最後は涙声に聞こえた。

「わたしも」むんが受けとめる。「あの時、両親と弟が北海道――たぶん美瑛あたり――にいてたんよ」

揣摩はハツとして顔をあげた。

「思い出した。どこかで見た顔だとずっと気になってたんだけど、舞風さん、アンタは遺族会のリーダーだったんじゃないの？ テレビで観たことがある」

「違う違う。アレはたまたまカメラを向けられたところにおっただけ。だいいち遺族会は昨日できたばかりやし、わたしは結団式をパスしたんやもん」

そうか、あの女性がキミだったのかと一人で合点している揣摩を尻目に、むんは伊里江を介抱する。萌黄も横からおろおろ見ている。

「……これくらい平気です。長年、島を駆けずり回る生活でいろんな怪我を経験しましたから。身体は頑健なのです。その代わり、兄以外の人と会話することがほとんどなかったので、私のしゃべり方ってかなり変でしょうね」

自覚はあったらしい。

むんは休憩を入れようかと提案したが、早くすべてを話したいという伊里江の意見に押されて、全員、元の位

置に着席した。伊里江の頬の痣が痛々しい。

「……最初に舞風さんから受けた質問、『北海道を消滅させたカラクリ』にようやく答えるところまで来ました。

……もちろんこれは兄の受け売りで、私は十二分に理解しているわけではないのですが」

「早く話せよ」揣摩が冷徹な声で促す。

「……判りました。能書きは極力省きます。

……人工ブラックホールを作るには、その“種”となる物質が必要です。いわば老いた太陽のように。

……兄が実験室で成功させたミニブラックホールの種に使われたのは、一匹の蚊でした」

「蚊って、血を吸ったりする、あの蚊？」とむん。

「……意外でしょうね。兄によれば、ブラックホール生成にもっとも適した物質は“生体”なのだそうです。彼は一匹の蚊を無重力ルームの中で巨大な圧力をかけ、崩壊させることで、ブラックホールを誕生させたのです。

実験室の壁を吹き飛ばすほどのエネルギーを持った」

「……」

「……そして生体の中で、とりわけ高い“生体エネルギー”を持っているのが、人間なのだそうです」

「——！」

萌黄は恐怖の予感に戦慄を覚えた。先を聞くのが怖い。しかし伊里江の話はそんな思いを上まわるものだった。

「……兄からの “予告メール” には、次のように書かれていました。

……『今回の種には人間を使うことにした。二歳ぐらいの子供だ。先ほど街なかで拾った。かわいそうだが、効果的な警告を発するためには、犠牲を厭^{いと}うてなどいられない』と。

……兄が “時限爆弾” となる子供を仕掛けたのは、大雪山の中腹だったそうです。後日送られてきた彼のメールに書かれていました。彼は遠方からブラックホールが生まれるのを眺めていたそうです。突然、空がくもったかと思うと、巨大な竜巻が現れ、田畑や山を次々と飲み込み、わずか数十分で広大な北海道が丸ごと吸い込まれてしまったといえます。

……警告は日本政府に対して突きつけられました。彼は、私たち兄弟の身の安全、および研究活動に対していかなる者も干渉し得ない十全な環境を求めています。これが受け入れられない場合、今度は国ごと——日本列島ごと消滅させるぞと」

「そんな無茶な！」むんがむせたような声を上げた。

「……いいえ、無茶ではありません。冒頭にもお話ししたように、それはもう実行されてしまった後なのですよ。

……『いかなるテロにも屈さず』の姿勢を貫いた山寺総理ら政府に対して、兄は、押してはならない最後のボ

タンを押したのです」

16

「信じられない——」

むんは自分の膝を叩いて抗議の意志を露わ^{あら}にした。

「どんな理由があろうと、許されることやないわ！ 確かにお兄さんは誘拐されそうになったり、命を狙われたり、不当な扱いを受けたかもしれない。けどなんで関係ない人たちを巻き添えにせなあかんのよ！」

「その通りだ！」横から揣摩も加勢する。「平和利用が目的だ？ 笑わせるじゃないか。お前の兄貴のやってることは、国際指名手配のテロリストにも劣らない、いやそれ以上の悪行なんだよ！」

伊里江は、非難の声を受け流すように、ひたすら無表情で宙を見つめていた。いやその視線の先には、萌黄のTシャツに空いた“穴”があった。

「……あなたがたの言い分は至極もつともだと思えます。いくら本来の目的を取り戻すためとはいえ、大量破壊兵器にしましては本末転倒も甚だしい。

……だから私は、兄の企みを阻止することを決意しました」

「えっ？」

図らずも、聞く側三人の驚きの声がかぶった。

「——兄貴を裏切ったってのか？」

「……いいえ、間違いは諫め^{いさめ}なくては、ということです。彼は警告と言いましたが、あれでは人工ブラックホールの威力を内外にアピールするようなものです。売り込みのための宣伝活動です。政府や警察などのサーバーを覗くと、北海道消滅以後、海外から潜入する武装集団が後を絶たないそうです。兄を拉致した者には、おそらく高額^{たか}の報奨金が約束されているでしょう。

……ここに至っては、躊躇^{ちゅうちよ}などしている余裕はありません。残された道は——道を踏み外した兄を、私の手で葬り、研究データをこの世から抹消するだけです」

言葉が途切れた。

それを見計らっていたように、雨戸に何かがぶつかる音がして、四人は窓を振り向いた。風の勢いは依然変わらないようだ。

「……とはいえ、兄の居場所が判らないことにはどうしようもない。私はすぐに島にあるコンピュータをフル動員して、彼の次なる動きを予測しました。北海道の時には、ほぼ中心地にある大雪山にブラックホールを仕掛けられました。もしかしたらそこには何らかの法則があるのかも知れない。そう考えて、彼が島に残していたハードディスクや光磁気ディスクを片っ端からスキャン

したのです。

……あまり期待してはいなかったのですが、綿密なスキャンをかけた結果、消し残されたデータをいくつかりカバリーすることができました。ほとんどは私の理解を超える数式やら使途不明のデータばかりでしたが、中には設備のマニュアルのようなものも散見されました。

……設備というのは、兄が島で自作した研究設備のことです。どうやって入手したか、ですか？ 私が全部やりました。インターネットを通じて購入したのです。購入先に使用目的を知られては困るので、部品単位で発注しました。受け取りは、島から舟で海岸に行き、そこで受け渡しです。もちろん裏ルートです。拳銃もそうやって仕入れました」

萌黄を撃った銃だ。

「……設備の中に、未完成ながらやけに大きな容器を持つ妙な格好の機械がありました。マニュアルのタイトルに『転送装置』と明記されたこのマシン、大いに気になりましたが、当面は関係ないと思い、捨て置きました。

……やがて私は、兄が次に仕掛けるとしたら関西ではないかと思うようになりました。確信があつたわけではありません。ただ彼の残したデータやファイルにやたら関西方面の地図や活断層に関する資料がありましたから。

……政府のほうでも、兄を捜すのに躍起になっていま

した。ちらほら目撃情報が届いていたようですが、残念ながら捕縛には至りません。しかし足跡を追うと、間違はなく日本列島を南下している。

……私は急ぎました。兄がXポイントにたどり着く前に迎え撃たねばなりません。

……しかし私はここで思いがけないものを発見したのです」

「えっ、なに？」とむん。

「なんだ？」と揣摩。

「な……」と萌黄。

「……おそらくここからの話は、これまで以上に荒唐無稽に聞こえるでしょう」

「能書きはいいって言ったろ」と揣摩。

「……そうでした。その消し残しファイルに書かれていたのは、私にも理解できるレベルのストーリーでした。人工ブラックホールがいかにして生成されるかという」

伊里江の唇の端からまた血が垂れた。しかし誰も話を中断しようなどとは言わない。

「……用意された種となるべき生体、まずこの生体に巨大な圧力をかけるわけですが、その段階では生体は圧おし潰れたりしません。生体は“向こうの世界”に放り込まれるのです。向こうの世界のことを兄は『鏡像宇宙』と呼んでいました」

「きようぞう、って鏡の像？」とむん。

「……そう、英語でミラー・ユニバースともMUとも書かれていました。その鏡像宇宙では、すべてが鏡に映したように逆になっているのだそうです。

……つまり、生体が高圧によってある一線を越えると、さながらピンホールカメラのごとく、その穴を通して、こちらの風景を向こうに映し出すのです。逆向き、裏返しに。

……映し出すどころではありませんね。裏返っている以外は、本物と寸分違わぬ世界が突如現れるのです。向こうにある建物は左右逆になっている。人間も同じで左が右に、右が左に。ただ本人にはその自覚がないのです。

……兄は、左右が逆になった人間を“ヴァーチャル”、種である人間を“リアル”と呼んで区別していました。

……萌黄さん、あなたがその“リアル”なのですよ」

17

（わたしは“リアル”……）

萌黄は周囲を見回した。

一見、何の変哲もないモデルハウスのリビングだが、よく見ると、そこここに不自然なところがある。マント

ルピースの上の上品な置き時計は、文字盤が左右逆で秒針も“反時計回り”に動いている。

壁に貼られたカレンダーや、住宅会社の販促ポスターの文字も裏返っている。

これらはすべて“鏡像”だったのか。

（わたしの頭がどうかになったんじゃないかな——）
それでも「なぜ？」という疑問が次々に浮かぶ。

疑問がさらなる疑問を呼ぶ。

「……元々の世界が正物質からできているのに対して」
伊里江の説明が続いている。「鏡像宇宙は反物質でできています。物質と反物質は、出会った途端に大爆発を起こす、相容れない間柄なのです。」

……ところが、先ほど種のことを“時限爆弾”と形容したように、リアルが鏡像宇宙に放り込まれても、すぐには爆発しません。生体エネルギーがリアルの中で十分満ちるまで、ある一定の時間が必要なのです。

……生体エネルギーが限界点を超えた時、エネルギーは放射され、反物質との間で反応を起こし、この鏡像世界全体は瞬時に爆発します。この爆発によってブラックホールが生まれ、元の世界を吸い込み、粒子レベルまで粉々に砕いてしまう——。

……北海道の時は、ひとりの子供の生体エネルギーで北海道の鏡像が生まれ、その爆発で正反両方の北海道が

消えました。これがあの事件のからくりです」

誰からともなくため息が漏れた。

ほかにどうしようもないではないか。

「……反物質の中で、なぜリアルがすぐ爆発したりせず、平気でいるかというところ、リアルは内包されたエネルギーによって守られているからだそうです」

揣摩が両手で髪をくしゃくしゃにしながら、頭の中がこんがらがってきたぞと愚痴る。

「……つまり、高い生体エネルギーを持つがゆえに種として鏡像宇宙に送り込まれたリアルは、そのエネルギー自体に身体を守られている、という仕組みなのです。」

……ただ、萌黄さんの場合は予測をはるかに超えていました。わずか一日半で、銃弾を跳ね返すほどのエネルギーを身につけていたとは」

揣摩が目丸くしながら、テーブルの上のひしゃげた銃弾を持ち上げ、萌黄の目の高さに掲げた。

生身の萌黄は、至近距離から銃弾を浴びても傷一つなかった。伊里江の話を裏付ける、これほど説得力のある証拠は他にないだろう。

「……まあ私も殺人犯にならずに済んだわけですが」

「そう、それよ！」むんが声を張り上げた。「どうして萌黄を撃ったりしたのよ？」

「……当然でしょう。生体エネルギーが最大になる前に

リアルな命を絶てば、爆発は未然に防げるのですから」

「あ——」

なるほど、筋は通っている。でも——。

「でも、それじゃ、わたしや揣摩さんはヴァーチャルなの？」むんが問い質す。

「……そうです」

「わたしやこの世界は、昨日の朝、急にできたわけ？」

「……はい」

「それじゃあ、まるで」揣摩の声が虚ろに響く。「俺たちはクローン人間じゃないか！」

「……鏡に映った、ね」

「クソつたれ、俺は絶対に信じないぞ！」

揣摩は拳を握ると、鼻息荒く、伊里江に掴みかかろうとした。

「……私を殴るのは自由ですが、怪我しないよう注意してくださいね」

「ど、どうということだよ？」

「……急ごしらえの鏡像宇宙はやワなのです。ヴァーチャルの身体もしかり。うっかり怪我をすると、身体が砂状化しますよ」

揣摩の顔が強ばった。横からむんが尋ねる。

「あなたはどうかなの？」

「……言うのが遅れました。私はリアルです。」

……兄を止めるのが間に合わないを知った時、例の『転送装置』を思い出したのです。マニュアルを見直すと、思ったとおりそれは鏡像宇宙に物質を転送する装置でした。時限爆弾のスイッチが押されるとセンサーが感応し起動するようになっていきます。私は装置が動き出すと同時に、装置に飛び込みました。

……気がつくところの鏡像宇宙にいました。すぐ私は左右逆になった銃とパソコンを持ち、島を後にしました。準備していた地図も左右逆になっていたので、方向を間違えることはありませんでしたが、文字まで逆なものには少しばかり苦労しました。

……本土に渡ってから、政府や警察のサーバーには侵入し続けていました。ところが兄の目撃情報は、滋賀県境を越えた辺りでプツリと切れていたのです。

……どうすべきか悩みました。すると次に飛び込んできたのは“リアル”発見の報です。政府もブラックホールの仕組みを知っていたことに驚きました。すぐに判ったのですが、先に兄が送りつけていた警告ファイルに付記されていたそうです。政府は兄の傲慢さのなせるワザだと受け取っていました。しかしあらかじめ知り得たからこそ、政府は特殊部隊を準備しておくことができ、リアル探索の態勢を整えておくことができたのです。

……萌黄さん、あなたの家を襲ったのは、政府が派遣

した連中なのですよ」

衝撃だった。萌黄を狙った迷彩服たちは、政府の回し者だったとは。

母の仇は、政府なのだ――。

18

「……彼らは警察や自衛隊とは別の組織です。

……自分がヴァーチャルであるを知った人間は、たいていは深い絶望に陥ります。下手な怪我を負うと砂になつてしまふし、クローンのような存在ですし、生きている意義は、いずれ訪れる大爆発において火薬としての役割を果たすため――。現に政府の中でも、数人の閣僚が即日、辞職願を提出したそうです。

……それゆえ、事情を知った上での確な判断と行動ができる人間が、特殊部隊として選ばれたといえます。過去や前歴、前科を問わずに。

……彼らは手始めに、発見第一号のリアル、ハモリ氏を自殺に見せかけて葬りました」

「ええっ！」

萌黄は思わず大声を上げた。

「……テレビであれだけ大々的に告白すれば、殺してくれと言つてるようなものですからね。

……ただ気に入らないのは、首を吊ったハモリ氏が発見される直前、一般人らしい二人組が逃げるのを見たという目撃情報です。まさか兄がハモリ氏を逃がそうとしたとは思えませんが――。

……いずれにせよ、一人目のリアルを消した連中は、勢いに乗って、他のリアル探しに全力を注ぎました」

「他のって、リアルは何人いるの？」とむん。

「……十二名です」

「十二名！ そんなに？」

「……はい。兄のメールによれば」

「どうしてそんなに必要なの？ それにどうやって選び出したの？ 萌黄は気づいてなかったのに」

「……兄はどこか秘密の場所に、本格的な転送装置を設けたようです。ブラックホール生成装置ともども、大がかりなものですから、秘密の支援者がいるのでしょう。」

……そしてリアルを選出にはコンピュータによる無作為の選別が行われたそうです。その時点で最も高い生体エネルギーの持ち主を、遠隔操作で鏡像宇宙に連れ込んだのです。ハモリ氏や萌黄さんが選ばれたのはまったくの偶然なのですよ。

……十二名ものリアルが必要な理由ですが、それは爆発させるのに一番効率的な構造だからです。

……萌黄さん、正多面体って知ってますか？」

いきなり指名された萌黄は、ごくんと唾を飲み込む。

「え、ええ、——『すべての面が合同な正多角形からなり、どの頂点に集まる面の数も同じである立体』……」

「よくスラスラと出てくるなあ」

揣摩が感嘆し、萌黄はまた俯く。

「……それでは揣摩さん、正多面体はいくつあるか判りますか？」

「そんなもの——ええつと、サイコロみたいな箱はすべて正方形でできてるから、そうなんだろう？ サッカーボールもそうなんじゃないか」

「……正六面体は正解ですが、サッカーボールは正五角形と正六角形の集まりなので、準正多面体になります」

「クイズなんかどうでもいいよ。その正ナントカがどうしたっていうんだ？」

「……この世に正多面体は五種類しかありません。

……正四面体は、正三角形が四枚で頂点が四。

……正六面体は、正方形が六枚で頂点が八。

……正八面体は、正三角形が八枚で頂点が六。

……正十二面体は、正五角形が十二枚で頂点が二十。

……正二十面体は、正三角形が二十枚で頂点が十二」

「はあ」

「……複数のリアルを正多面体の頂点の位置に配置すると、互いの相乗効果でエネルギーを最大限に引き出すこ

とができるのだそうです。兄は、正二十面体の構造を採用したと見ていいでしょう

……どうして正二十面体を採用したのか？ この点は理解に苦しみます。なぜならたったひとりの子供でも北海道を消せたのですから、日本列島程度なら、四人でも十分でしょう。だいいち一カ所に集めるのが大変です」
恐ろしいことを、淡々と口にする。

「じゃあ、十二人だと、どれくらいの規模になるの？
アジア全体が吹っ飛んでしまうんじゃないの？」

「……甘いですよ。種の人数が増えるごとに、効果は等比級数的に増大します。計算したところによると、十二名の場合――」

萌黄は、背中に幾筋もの汗が落ちるのを感じた。

19

「……この銀河系全体が、木っ端微塵になります」

「……」

「……逆に言うと、鏡像世界は、この銀河系の大きさしか存在しません。天文学者は、天の川は見えても大マゼラン雲が見えないことに、今ごろ首を傾げているでしょうね」

「他人事ひとごとみたいに言うなよ！」

「……性分なもので。」

……実際、そんなスケールの大爆発を企てるなど、狂気の沙汰だと思いましたよ。でも兄は最後のメールでこう告げていました。『すまない。お前まで巻き添えにした兄を許してくれ』と。」

……彼の所業は許せませんが、心情だけは汲み取ってやろうと思います。たったふたりの兄弟ですから」

「バカバカしい！」

揣摩はテーブルをドンと叩くと、立ち上がって部屋の中を歩き始めた。

「あと聞きたいのは」むんが険しい眼差しで問いかける。「爆発までどのくらいの時間があるの？」

「……二週間です」

むんも萌黄も息を飲んだ。たった十四日。

「……私が話せることは、以上かと思っています」

伊里江は、ふーっと息を吐くと、背もたれに身をゆだねた。

「最後にもうひとつだけ。どうして洗いざらい喋る気になったの？」

「……兄の野望を阻止するため、私は十二名のリアルを全員抹殺するつもりでいました。でも慣れないことはすべきではありませんね。一人目の暗殺さえこなせなかったのですから。」

……運命かもしれません。こうなったらスッパリあきらめて、十四日後に兄が本懐を遂げるのをじっくり見届けたい——そう思ったからです」

話が途切れると、時計の音が気になりだした。外の風がだいぶ弱くなったせいだろう。コチコチと時を刻む音がやけに大きく響く。

「もう午前0時になるわ」

むんがくたびれた声を出すと、揣摩もフローリングの上に腰を下ろして、肩を揉み始めた。

長い半日だった。伊里江の話から受けた衝撃と絶望感が、肉体的な疲れ以上に、それぞれの心に暗い影を落としていた。

「俺はオリジナルの鏡像なのか……」

しよげる揣摩に、誰も声をかけることができなかった。萌黄も自分がリアルに選ばれてしまったことに、どう対応していいのか、心の整理がついていないのだ。

「よっしゃ、寝ましょ！」

むんが元気よく立ち上がった。

「揣摩さん、お湯出るよね？」

「ああ」

「それじゃシャワーでも浴びるかなー。萌黄も浴びるでしょ？ 今日には飛んだり走ったりで汗まみれやし」

萌黄は顔を上げ、弱々しい微笑みを返した。

揣摩も手を挙げて賛成と言った。

「頼まれた女性用の下着とTシャツも買ってあるから、
適当に着替えてくれな」

「サンキュー。そいじゃお先に。——萌黄、いっしょに入ろう」

「ウン」

その夜。四人はリビングで眠った。

ソファは萌黄とむんが使い、揣摩と伊里江はフロアリングの上に。

伊里江の手足を自由にするかどうか、三人の間で相談が持たれたが、安全とは言い切れないとする揣摩の意見が、むんと萌黄の逡巡^{しゅんじゅん}を突っぱねた。

眠りにつく前、萌黄は伊里江に尋ねた。

「ねえ、元の世界では、わたしのお母さんは生きてるかな？」

伊里江はかすかに微笑みながら答えた。

「……もちろん」

萌黄は安心して、深い眠りへと落ちていった。